

# 2014年春/カンボジア スタディツアー 活動報告書

作成：浜松大学 健康プロデュース学部 心身マネジメント学科 4年 伊藤孝充

活動期間 : 2014年2月25日(火)～3月1日(土) 4泊5日

活動メンバー : 浜松大学 木村ゼミ

4年 伊藤 孝充 松田 有生 山中 仁志

3年 石川 愛弓 匂坂 美咲 大石 朋香 久安 久留実

M1 中西 彩乃

教員 木村 佐枝子

以上9名

## 全行程 詳細

### 2月25日(火) 移動日

7:30 中部国際空港 集合

9:30 中部国際空港 出発

12:00 上海浦東国際空港 到着

15:00 広州白雲国際空港 到着

24:30 プノンペン国際空港 到着

So Vanna さん、タイ・キムホーンさんと合流

25:00 ホテル チェックイン

### 2月26日(水) 活動1日目

7:00 朝食

8:00 ホテル出発

9:00 トゥールスレン博物館 見学

11:00 キリング・フィールド 見学

13:30 昼食

14:30 移動図書館

16:00 英語教室 (2ヶ所に分かれて)

## 2月27日(木) 活動2日目

- 7:00 朝食
- 8:00 ホテル出発
- 9:00 移動図書館
- 11:00 日本語教室
- 12:30 昼食
- 14:00 移動図書館
- 17:00 お別れパーティー 食材買い出し
- 19:00 夕食

## 2月28日(金) 活動3日目

- 6:00 朝食
- 7:00 ホテル出発
- 7:30 市場見学
- 9:00 LaValla School 見学
- 13:00 昼食
- 14:30 移動図書館
- 16:30 お別れ会パーティー
- 19:00 市内デパート視察
- 20:00 夕食

## 3月1日(土) 移動日

- 6:00 ホテル チェックアウト
- 8:00 プノンペン国際空港 出発
- 10:30 広州白雲国際空港 到着
- 16:00 上海浦東国際空港 到着
- 21:00 中部国際空港 到着

### 「トゥールスレン虐殺博物館」

活動初日は朝からプノンペン市内にある「トゥールスレン虐殺博物館」へ行った。この場所はポルポト政権時代の強制収容施設で、2年9か月の間に14,000～20,000人が収容されたと言われ、そのうち生還できたのが8人のみであった。ワンナさんの紹介の下、施設内を見学した。最初に案内された部屋の真ん中には鉄のベッドと鎖があった。収容された人々が監禁された場所であるという。外には大きな水瓶があり、その上にある鉄棒から収容者を吊るして水の中に沈めるといった拷問を行った場でもあった。次に案内された部屋には収容された人々の写真が何百枚も掲示されていた。子どもから大人まで多くの人々が収容されていたことが良くわかり、写真を通して多くの人から「助けてくれ」と言われているような視線を感じることができ、とても胸が苦しくなった。次に収容者の独房も見せてもらい、人ひとりがやっと入ることのできるスペースで収容者の人は窓の外の景色をどのような気持ちで見ていたのだろうと思った。一番最後の部屋にあった供養台では、参加した学生は誰に言われたのでもなく自らの意思で線香を炊き、手を合わせた。自分だけでなく、他の人たちにとっても感じるものが多い場所であったのであると感じた。

### 「キリング・フィールド」

プノンペン市内のトゥールスレン虐殺博物館から市外へ車で1時間ほど走らせた場所にある「キリング・フィールド」この場所もカンボジアの歴史を振り返るにあたり、欠かすことのできない悲しい出来事があった場所である。ポルポト政権下のカンボジアで大量虐殺が行われた刑場跡地であり、当時のカンボジアで全人口800万人のうちの300万人が殺されたという事実を自分の目で知る場所となった。

沢山の遺骨が並べられ、虐殺された人が来ていたと思われる衣類も置いてあり、重々しい空気が漂っていた。まだまだ、多くの骨が地中に埋まっており、柵で仕切られた土地には骨が落ちていた。ここへ来て、平和の尊さを体感することができた。



右：トゥールスレン虐殺博物館

左：キリング・フィールド

### 「英語教室」

1日目の夕方、二つのグループに分かれて英語教室を行った。もともとカンボジアの子どもたちは日常から英語を学んでおり、今回私たちはその英語の授業の時間を使わせてもらって授業を行った。今回私たちは授業を行うにあたり、日本の事を良く知ってもらいたく、日本の文化や独特のものを多く紹介する授業内容を計画した。「富士山」や「桜」など、日本のものを紹介していく中で、子どもたちが真剣かつ楽しそうに話を聞いてくれ、とても嬉しく思った。私たちの授業の後、中等部の学生らの授業に参加させていただいた。彼らが英語を学んでいる姿をみて、カンボジアに来る前に資料で見ていた子どもたちの学習能力が低いという事実を全く感じさせなかった。勿論、カンボジア全ての子どもたちが勉強できているというわけではないようだが、少なくとも今回私たちがお邪魔させていただいた村では、そのような問題はあまり無いようだった。逆に、彼らが真剣に学ぶ姿勢を見て、私たちももっと勉強をしなければいけないなという気持ちを抱いた。

### 「日本語教室」

2日目の午前中、今回、私たちをサポートしてくれたカンボジアの学生たちを中心に日本語教室を行った。私たちは、「しあわせなら手をたたこう」の歌を歌いながら、手足を使って動作の意味を学生たちに伝えようとした。学生たちは、みなノートにしっかり授業の内容を書き留め、日本語を理解しようと真剣に話を聞いていた。授業の最後には、みんなで席を離れ、広場で「しあわせなら手をたたこう」を一緒に歌いながら踊った。みんな少し恥ずかしそうではあったが、後半になるにつれて笑顔が多く見られ、楽しくできて良かった。



右：英語の授業を受ける小学生たち

左：普段の小学生の授業では、高校生が先生として授業を行っているようだ。

## 「移動図書館」

今回のスタディツアーを行った3日間、村で NERC が行っている移動図書館に同行させてもらい、私たちも読み聞かせのお手伝いをさせていただいた。初日の村で初めて子どもたちと対面をしたときには、すごく緊張したが、子どもたちとすぐに打ち解けられてよかった。私たちは今回、ゼミの先輩たちが作成した絵本を持っていき、その本を子どもたちに読み聞かせた。私たちが読んだ言葉をカンボジアの学生ボランティアさんに通訳してもらったので、子どもたちにも何とか楽しんでもらえたと思う。移動教室の全体の時間の内、半分は読み聞かせを行い、残りの半分は遊びを行った。1日目の村では「だるまさんが転んだ」などの体を使う遊びを行い、2日目、3日目などは折り紙やどろだんごづくりを行った。いずれの遊びも、子どもたちに喜んでもらえ、言葉が通じ合わなくてもお互いに楽しむことができた。



左：子どもたちと行った「だるまさんが転んだ」終始笑顔が絶えなかった。

右：絵本の読み聞かせ

## カンボジアスタディツアーを通して

5日間のスタディツアーを通して様々な経験ができた。カンボジアの国柄を体中で感じ取ることができた。例えば、街の雰囲気の違い、交通ルールの違い、思想の違いなどを経験し、日本にいる時の常識が通用しなく、驚きの連続であったが、新鮮でとても面白かった。カンボジアの大学生のみなさんと交流が持てたのも、非常に良い経験であった。子どもたちが真剣なまなざしで勉強に励んでいる姿を目にして、自分たちが忘れかけていた勉強に対する姿勢というのを再確認させてくれた。この気持ちを忘れることなく、これからの人生に活かしていきたいと思う。また、今回スタディツアーに参加した学生の殆どが、初めて海外へ足を運んだ。皆、ボランティア活動に携わってきたが、国際協力のボランティア活動に触れたことによって、より幅広い視野を持って今後の活動に活かすことができると思う。今回の活動をきっかけに、今後も浜松大学の学生にスタディツアーに参加してもらい、日本とカンボジアがより友好的な関係を築いていけるように頑張りたいと思います。